【８】　「さわる」と「ふれる」・解答例

他人の痛みや思いを理解することは難しいし、完全な理解などありえません。患者の抱えている痛みや苦しみを受けとめるところから医療は始まりますが、それがどこまで可能なのかはわかりません。一方で専門家として病気という「現象」を客観的に捉え正確な診断を下すことが医師の基本的な仕事です。患者が抱える苦しみと病気という現象を科学的捉えることを両立させるのは至難です。「患者の痛みを理解できる医療者になる」というような言葉をよく聞きますが、そう言ったからといって理解できるようになるわけではありません。この困難にどう取り組み、現象としての病気を正確に捉えながら、どうすれば他人の痛みや苦しみに少しでも近寄れるのかを考えていくことが大切です。「理想の医師像」や「医師に求められるもの」などの面接での質問や MMI の対人関係に関わる質問への対応としてこの課題はは不可欠です。。

問　医療においては、最後の段落で述べられる「さわる」と「ふれる」の両方の側面が重要である。どのような場合に「さわる」と「ふれる」が重要になるかを，その理由とともに 800 字以内で述べなさい。

【概要】

日本語の触覚に関する動詞には「さわる」と「ふれる」がある。「さわる」は痛そうな感じがする。「ふれる」は手当てをしてもらえそうな感じがある。虫や動物には「さわる」と言う。しかし気体には「さわる」ことができないが、冷たい空気に「ふれる」と言う。話題についても「ふれる」「さわりだけ」と言い、感情でも両方の表現がある。哲学の立場からは「ふれる」は相互的で、「さわる」は一方的だと考える

解答例

「さわる」というのは、自分の感覚が主体で、対象がどのような存在かを確かめるために知覚情報を得る行為である。そういう意味で哲学者が「一方的」というのは理解できる。医療で言えば、「触診」がこれにあたるだろう。患者が腹が痛いと言えばその膨満感などを調べるために腹部を「さわって」診る。これは触れることによって得た知覚情報を、知識や経験に照らして診断データにつなげていくための行為である。触診でも腹を押してみて痛いかどうかを患者に尋ねる場合、相手の反応が問題になるので相互的なようだが、あくまでも痛みの有無や度合いという「情報」を得るための行為なので一方的である。

「ふれる」は、その知覚から情報を求めるというよりは、それによっておこる対象の変化をみようとする。しかし、それだけではなく、それが自分に対してどのような影響をもたらすかの両面の変化を捉えようとする行為である点で、哲学者は「相互的」というだろう。これは医療で言えば、傷口に「ふれ」てみて、痛いようであれば、なるべく痛くないように気を遣って痛くないように手当てするという行為になる。相手に生じる「痛み」と

それに対して自分がどう対処するかの両面に注意が向けられるのである。

また、患者から問診などで話を聞くとき、どこまでその人のプライバシーに「ふれ」てよいかに気を遣うはずだ。自分の言葉がどのように受け取られるか、相手の反応を見ながら言葉を選ぶ。これは特に痛みを持つ他者と「ふれあう」ときに大切になる。つまり、「ふれる」では医師が医学的に必要な情報を得るためだけではなく、患者が何を感じ、何が必要なのかを受けとめることが大切になる。

つまりこの二つの言葉は、医療に求められる二側面、病気という現象への医科学的アプローチと患者への人間的アプローチを表しているものと考えることができる。